

ハワイ大学がんセンターとの 国際共同TR

東京理科大学 薬学部 生命創薬科学科 教授 ひがみ よしかず
樋上 賀一

ハワイ大学がんセンターとの国際共同研究は、2014年10月14日にハワイ大学のTechnology Licensing Organization (TLO; 大学内で開発された技術や発見の特許にし、企業に売り込んでビジネスにつなげる組織)の職員が訪ねてきて、突然スタートしました。訪問の際、TRセンターのシーズを紹介したことがきっかけでした。その後、本学の研究戦略・産学連携センターの野村修博士の尽力により、共同研究の可能性を検討するために、2015年5月12日～16日に、理学部応用化学科の鳥越峰教授、野村修博士と筆者の3名でハワイ大学がんセンターを訪問しました。

同センターは観光で有名なワイキキビーチから西北西に約6～7km、アラモアナショッピングセンター徒歩圏内にあるハワイ大学

医学部に併設されており、まるでリゾートホテルを思わせる研究施設でした(写真1)。この訪問で、「PARP阻害剤を用いた乳がん治療薬の開発(Turkson教授と筆者が担当)」および「安定性の高いアンチセンスRNAを用いた膀胱がん治療法の開発(Rosser教授と鳥越教授が担当)」というテーマで、共同研究開始に向けた事務的作業に入ることが決まりました。

そして、2016年6月25日にハワイ大学がんセンターから4名、国立がん研究センターから2名の研究者を講演者として招待して、国際シンポジウムを開催し(写真2)、同時に共同研究を開始することになりました。この前には、共同研究開始のためのさまざまな契約文書を作成し、やり取りしながら修正を繰り返しました。

その後、本学のシーズ(鳥越先生が設計・作製したアンチセンス核酸と筆者が保有している化合物)を先方に送り、共同研究がスタートしました。2017年5月16日～20日に鳥越教授、秋本和憲教授(薬学部)と筆者とで再びハワイ大学がんセンターを訪問し、共同研究成果の報告、今後の共同研究の方針について、特に共同研究費の捻出をどうするかかなり厳しい交渉も行われました。

2018年10月20日にハワイ大学



写真1 ハワイ大学がんセンターの外観
まさに南国ハワイのリゾートホテルを思わせる。



写真2 ハワイ大学がんセンターとの合同シンポジウムでの集合写真 藤嶋昭前東京理科大学学長にも出席いただいた。

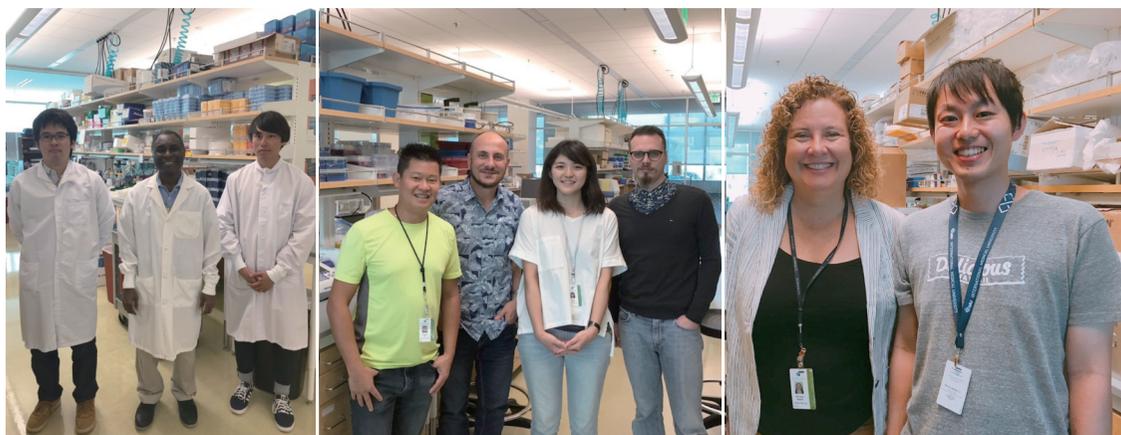


写真3 ハワイ大学がんセンターで研修中の4名の大学院生と指導教員
左から学生, Dr. Turkson, 学生, 一人とばしてDr. Febbri, 学生, 一人とばしてDr. Matter, 学生。

がんセンターから2名の先生 (Dr. TurksonとFebbri) および国立がん研究センターから2名の研究者を講演者として招待して、再び国際シンポジウムを開催し、同時に共同研究の進捗状況を話し合いました。また、学内予算である「若手研究者養成のための国際研究交流支援事業」に採択されたため、TRセンターのリサーチアシスタントを務める薬学専攻博士課程および薬科学専攻後期博士課程の計4名の大学院生がハワイ大学がんセンターで約2.5ヵ月間研修することが可能となりました。その顔合わせも兼ねてのシンポジウムとなりました。

この4名はビザ取得に手間取ったりしたも

のの、2019年1月に無事ハワイに向けて出発することができました。この稿を執筆中である現在はDr. Turkson, Dr. Febbri, Dr. Matterの研究室で、実験を行っています(写真3)。短期ではありますが、国際経験を積んで一回り大きくなって帰ってきてくれることを期待しています。

ハワイ大学がんセンターとの付き合いを通じて、契約社会である米国の大学との共同研究の面倒さを痛感した数年間でしたが、さまざまな教職員にお助けいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。今後もこの縁を大切にして、国際共同研究の成果を出していきたいと思っています。